



苫小牧市まちづくり戦略に基づく 地方創生事業業務 実施事業のご紹介

2026年6月30日

目次

1. 選ばれるまちとして必要な施策

2. 快適な住環境_課題解決型教育・グローバル教育

3. 交通物流_交通施策

4. 産業振興_市内企業向けGX推進・市民へのGX意識普及・啓発

本事業は、これまで策定してきた上位計画に基づいた政策・施策として実行し、具体的な成果として結実させ、選ばれるまちとして成長を目指すために必要な施策群です

本事業の目的

「未来まちづくり戦略」における各施策・事業を展開することで、本市の地域資源や都市構造・機能を活かした民間参入や活動をより促進し、かつその活動が市民の生活の質向上や幸福・心身の充実など暮らしの豊かさにつながるまちづくりを実現する

【基本的考え方】

都市再生コンセプトプランに掲げる3つの成長戦略を本事業の施策を通じて実現することで、交流人口を増加し、新規雇用を創出する

到達目標

- 交流人口増加 外貨獲得
- 新規雇用創出 所得水準向上

本プランの目的

ダブルポートシティの特性を生かした成長戦略

- ①ものづくり産業のさらなる展開
- ②臨海ゾーンにおけるロジスティクスの展開
- ③臨空ゾーンにおける国際リゾートの展開

方向性

都市再生コンセプトプラン策定

各施策に反映

環境と産業が共生する持続可能な都市の実現

3つのW：未来型都市再生コンセプト

都市再生のキーワード：3つのW

Walk

Water

Work

目標：交流人口増加（市民・訪問客等）
・エリア収入・不動産価値・税収向上・産業需要増

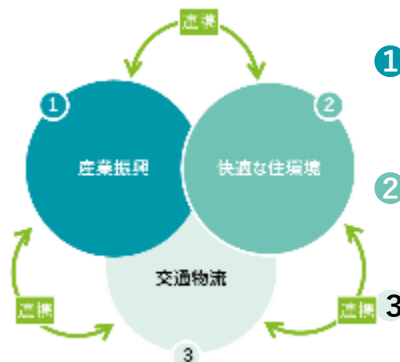
交流を促進するまちづくり

中心市街地再生
ウォーターフロント
交流・親水機能強化
デザインの力・リノベーション・象徴

他都市との差別化

次世代産業との連動
本市の強みを強化

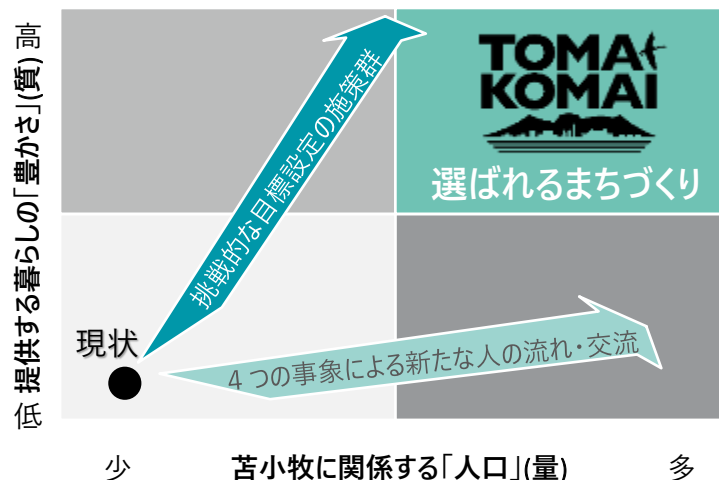
【事業概要】



- ① GXまちづくりとして大企業によるGX推進のみならず、市内の中小企業のGX推進及び様々なまちづくり政策とのGX連携
- ② GX・半導体産業の進展に伴う、次世代人材の育成と新たな人の流れに対応できる多様な住環境・滞在環境の整備
- ③ 東西に広がる都市構造や新たな移動需要に柔軟に対応できる新たなモビリティサービスの構築

【目指す姿・成果】

挑戦的な目標の施策群を将来的な回収を見通した先行投資として実行し、選ばれるまちづくりを実現する



事業で目指す状態

産業振興

快適な住環境

交通物流

- ◆ 半導体・GX・IR等、企業の更なる集積や市内事業者の新たな事業機会を捉え、市内のGX推進が実現
- ◆ 新産業の集積により見込まれる就業者やその家族にとって生活拠点として選ばれるまちとして、教育環境と生活環境が充実
- ◆ 多様な働き方・暮らし方に対応した市内の生活空間を繋ぐ、輸送力と速達性が確保された基幹交通システムにより、市全体でひとの動きが活性

課題解決型教育

事業状況サマリ

施策名：課題解決型教育に係るカリキュラム開発

本施策の目的	市内中学校の総合学習を活用し、課題解決に関する教育プログラムを開発。今後3年間で市内全域の中学校へ展開することで、課題解決型人材の育成・輩出を目指す
3か年でのゴール	モデル校での実証から市内全域へ、教員が主体となる課題解決型教育の定着と自走化を実現する
R7年度の実績	課題解決型教育の導入方針・事業像とR8モデル校実証の実施方法・体制、カリキュラム／教材構成を具体化した計画書を作成

事業状況

サマリ	苫小牧市の課題解決型教育の方針合意とプログラム設計を確定し、3か年導入に向けてR8年度にモデル校での実証を実施・評価する		
	R7年度	R8年度	3か年
取組・成果	モデル校での実証実施を見据え、教育プログラムの具体的な内容や学校現場での活用方法、運用上の方針について整理	モデル校と連携して、課題解決型教育プログラムを学校活動の中で実践し、学習内容・進行方法・体制面の実行可能性を検証	確立したプログラムを市内中学校へ段階的に展開するとともに、教員が主体的に運用できる体制を整備し、学校教育の中に継続的に位置付く仕組みを構築
成果物	- 課題解決型教育の方針資料 - 次年度の実証を見据えた教育プログラム・活動計画	- プログラムの実施結果フィードバック - 他校展開の候補先リスト	- 複数校での導入実績 - プログラム導入・指導マニュアル

本事業については、3年間の段階的展開により、モデル校での実証実施から市内中学校への横展開も見据えた持続可能な実施体制確立を目指しています

事業の方向性（3年間の全体像）

事業の目的

以下の目的を達成するために、中学生が地域の課題を「自分事」として捉え、課題解決能力を育成する「**苦小牧の未来を創る 地域課題解決プログラム**」の開発・導入を目指す

- 課題解決の思考法の学習と実践を通じて、未来思考・課題解決能力を備えた人材を育成する
- 地域や地場産業における課題を知り、施策を考えることを通じて、苦小牧市の発展に必要な人材を育成する

	2025年度（R7年度） 検討フェーズ	2026年度（R8年度） 実証フェーズ	2027年度（R9年度） 展開フェーズ
主な 取組み	- 関係各所との協議・調整を通じた3年間の事業展開・各フェーズにおける実施事項の決定 - モデル校における実証に向けた課題解決型学習プログラムの設計・開発 - 次年度以降の実証・展開に向けた準備（モデル校との実施方法検討、年間計画への組込み方針の決定、など）	- モデル校の1年生でプログラムを実証。総合的な学習の時間を活用し、地域課題解決型プログラムを実施 - プログラムの検証と改善を行い、生徒の学習効果、教員の負担感、地域連携先の評価などを測定 - 成果の測定と評価を通じて、次年度への改善案を作成し、対象学年や他校への拡大展開の準備	- 他校で試行実施を行い、異なる学校環境での実施可能性を検証 - プログラムの精緻化と教員向け指導マニュアルの整備を進め、学校の自走化および全校展開の準備
対象	—	モデル校1年生	- モデル校1年生 - 他校1～2校の1年生

本プログラムを通じて課題解決能力の基盤を育成し、この基盤を他教科・他活動・学年間の学びへ有機的に接続することで、3年間を通じた持続的な成長を目指します

本プログラムと中学校3年間の学びへの接続

主体性と進路実現の確立

第3学年

- 修学旅行、進路指導、自己実現学習
 - 主体性、課題解決力の向上
 - 社会や進路に向け、自らの考えを構想し、協働・発信できる生徒の育成

✓ 修学旅行や自己実現学習では、これまで培った課題設定力・協働力・表現力などを活かし、**社会や文化を多面的に捉えながら主体的に行動**できる

✓ 進路指導においては、**第1・第2学年での学習・体験を通して形成された職業観やキャリア感をもとに、具体的な進路イメージを描ける**

能力の深化と応用学習

第2学年

- テーマ学習（SDGs等）、職業体験、宿泊研修
 - 課題設定の高度化、分析の深度化、協働の質向上

✓ 第1学年でのPBL経験により、テーマ学習（SDGs等）では**課題設定の精度が向上し、調査・分析の深度が増している**

✓ 職業体験や宿泊研修においては、既に一定の知識や視点を有しているため、**より主体的で発展的な活動が可能となっている**

課題解決基盤の育成と地域理解

第1学年

■ 課題解決型学習（PBL）

- 課題解決能力の基盤育成、地域や業界に対する認知・理解

✓ 課題解決型学習（PBL）で培った**課題発見力・分析力・想像力・協働力・表現力**が、他の授業や活動にも活用できている

✓ 防災体験学習やキャリア学習（職業調べ）とも併せて、**地域や職業・業界に対する理解が進み、興味・関心が芽生えている**

生徒が興味を持って主体的に参加できるよう、本プログラムは学習意欲と没入感を高める一貫したストーリー仕立てで展開します

プログラムコンセプト案_苦小牧みらいデザインプロジェクト『デザイン・Our・苦小牧』

コンセプト	■ ストーリー 生徒たちは、苦小牧市長からの特命を受けて組成された「みらいデザインチーム」の一員となる プログラムの冒頭、苦小牧市長から「地域の課題を解決し、未来をデザインせよ」という特命を受け、チームで協力しながら複数のミッションに挑戦し、最終的に市長や事業者に解決策を提案することを目指す、極めて重要なプロジェクトである プロジェクト名： 苦小牧みらいデザインプロジェクト『デザイン・Our・苦小牧』 生徒の役割： みらいデザイナー 最終目標： 調査・分析・議論を通じて練り上げた「みらいデザイン計画」を策定し、最終発表会で市長、地域住民、保護者の前でプレゼンテーションを行い、解決策案を採用してもらう メッセージ：「さあ、君たちの手で、苦小牧の未来をデザインしよう！」
導入シナリオ	✓ プログラムのキックオフで、苦小牧市長からのメッセージを受け取る ✓ 「未来の苦小牧を担う君たちに、特別なミッションを与える。特別チームとして、この街が抱える課題を君たちの斬新な視点で分析し、解決策を提案してほしい！」という力強いメッセージにより、生徒たちの当事者意識とモチベーションを引き出す
ナビゲーターキャラクター	✓ 各教材には、生徒たちを導くナビゲーターとして、親しみやすいキャラクター「とまチョップ」が登場する ✓ 苦小牧市公式キャラクターであり、市長からの特命担当（副市鳥、とまこまい観光大使）という設定で、各ミッションの提示や、思考のヒントを与えるメンター役を担い、生徒たちの学習をサポートする

R8年度からモデル校の1年生を対象に、「総合的な学習の時間」を活用して本格的に本プログラムを実施しています

R8年度プログラム実施内容

フェーズ	名称	授業回	実施月（案）	主な内容	位置づけ
フェーズ0	オリエンテーション	2回 ※学活等	5月	プログラム説明、テーマ選定、目標設定	オリエンテーション
フェーズ1	プランニング (導入・理解)	第1回～第4回	6月～7月	プログラム目的の理解、 コンサル手法の基礎	本プログラム
フェーズ2	アプローチ (探求・発見)	第5回～第9回	9月～10月	フィールドワークと情報収集・整理	本プログラム
フェーズ3	アイディエーション (分析・検討)	第10回～第12回	11月～12月	データ分析、解決策立案、提案内容検討	本プログラム
フェーズ4	プレゼンテーション (提案・発表)	第13回	翌1月	提案書作成、発表	本プログラム
フェーズ5	アクション (振り返り)	第14回	翌2月	プログラム全体の振り返りと評価	本プログラム

本プログラムは、市長からの特命を達成するための「14のミッション」で構成されます。各ミッションは連動しており、一つずつクリアしていくことで、最終的な「みらいデザイン計画」の策定へと繋がるよう設計しています

プログラム構造：全14のミッション

フェーズ	コマ	項目	内容
フェーズ1 プランニング	Mission 1	プログラム説明、苦小牧を知る	市長からの特命を受け、チームが始動。プログラムの全体像と基本的な思考法を学ぶ
	Mission 2	テーマ深掘り等	
	Mission 3	リサーチ基礎	効果的・効率的に情報収集を行うための、適切なリサーチ手法を学ぶ
	Mission 4	仮説設計	複雑な課題を構造的に捉えるための手法「MECE」「ロジックツリー」を習得する
フェーズ2 アプローチ	Mission 5	ヒアリング準備①	これまでのリサーチ結果をもとに、ヒアリングに向けた情報整理を行う
	Mission 6	ヒアリング準備②	
	Mission 7	ヒアリング実施	実際に街に出て、地域の人々の「生の声」を聴くヒアリングと観察を実践する
	Mission 8	ヒアリング結果まとめ①	現場で集めた多様な情報を持ち寄り、整理・分類し、課題の全体像を把握する
	Mission 9	ヒアリング結果まとめ②	分析を繰り返し、表面的な事象の奥にある、本当の原因「根本原因」を探求する
フェーズ3 アイディエーション	Mission 10	解決策立案①	これまで収集した情報を分析し、データに基づいた解決策のアイデアを生み出す
	Mission 11	解決策立案②、提案書作成①	多数のアイデアを「効果」と「実現可能性」の2軸で評価し、最もインパクトのあるプランを意思決定する
フェーズ4 プレゼンテーション	Mission 12	提案書作成②	決定したプランを、想いとロジックを込めた説得力のある「提案書」としてまとめる
	Mission 13	ピッチ大会	市長や地域の人々を前に、チームで創り上げた「未来デザイン計画」をプレゼンテーションする
フェーズ5 アクション	Mission 14	振り返り	プロジェクト全体を振り返り、この経験を次の挑戦に繋げる

プログラムコンテンツの作成にあたっては、苫小牧市教育委員会およびモデル校の先生方と協議を重ね、対象生徒に適した表現・難易度となるよう工夫を進めています

コンテンツイメージ

Image

仮説ってなに？

仮説ってそもそも何？どうやって立てるの？

【仮説 = 「こうではないか？」という予想】

- ・ フィールドワークで合っているか確認する
- ・ 仮説が間違ってもOK!

→ まずはたくさん想像して予想してみよう



調べ方のコツ

(例: 商店街に人が少ないのは、駐車場がないからではないか)

-  ① 調べた情報から考えてみよう
例: 「商店街がガラガラ」「商店街の客層は？」
-  ② 「なぜ？」を繰り返してみよう
例: 「なぜ商店街に人が来ないの？」
「なぜ商店街は選ばれないの？」
-  ③ 他の地域の事例を参考にしてみよう
例: 「どんな事をしたら商店街が賑わった？」
-  ④ グループで話し合ってみよう
→ みんなで考えたことを共有したら新しい発見が！



仮説は「たくさんの可能性」を考えてみるのが大切だよ！
間違えてもいいものだから、気軽に気付きをシェアしよう

作成のポイント

- ✓ **中学生に合わせた言葉遣い**
 - ビジネス現場で用いるコンサルティングのノウハウを、中学1年生でも理解できる言葉と例に置き換える
- ✓ **教材の視認性**
 - イラストや「とまチョップ」のひとことメモを活用し、文字情報に偏らない構成で視認性・可読性を高め、飽きずに取り組める表現にする
- ✓ **インプット・アウトプットのバランス**
 - 1コマ50分の中で、前半をインプット、後半をアウトプットに配分することで、理解の定着を促し、目標とする能力開発の達成につなげる

グローバル教育

事業状況サマリ

施策名：グローバル教育に係るカリキュラム開発

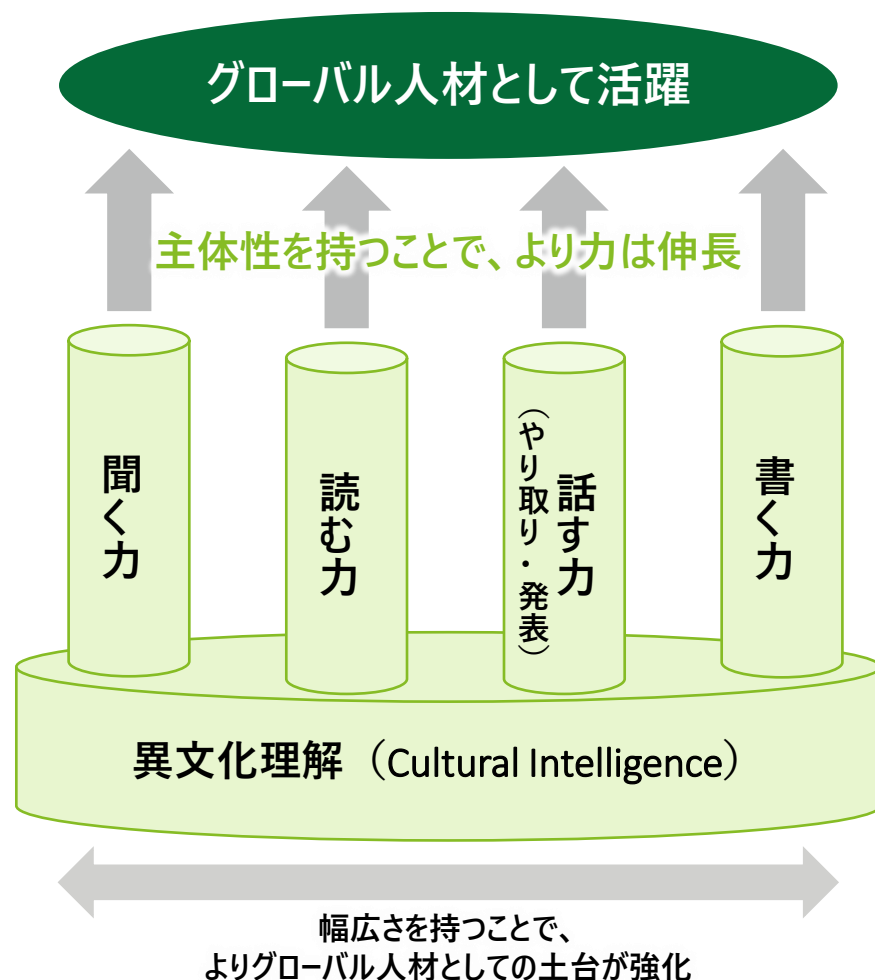
本施策の目的	英語や多文化に関わる時間をより多く費やすことのできるグローバル教育プログラムを開発。3年間で公教育へ展開し、市内におけるグローバル人材の育成・輩出を目指す
3か年でのゴール	グローバル人材像と教育方針を明確化し、現場実装可能なプログラムを体系化・段階展開、教員・ALT主導で定着させる
R7年度の実績	先進事例と検討成果を踏まえ、R8年度の実証に向けた実施方針・プログラム案を検討

事業状況

サマリ	関係者合意の下、苫小牧市のグローバル人材像と取組方針を確定し、3か年導入に向けR8年度は実施方法・ALT活用・教材の検討・実証を推進する		
	R7年度	R8年度	3か年
取組・成果	次年度以降の実証実施を見据え、グローバル教育プログラムの全体像や考え方、実施内容について整理	- R7年度の方針を基に、ALTや教員等と共にプログラム内容を具体化 - 上記プログラムを市内のモデル小学校の隙間時間（朝活、給食など）にて実証	R8年度実証プログラムを市内学校への段階的に展開していくと共に、教員やALTが主体的に運用できる仕組みを整え、学校教育への定着を推進
成果物	グローバル教育の方針資料（目指す人材像、教育の在り方、施策の方向性等）	- 実証を見据えて整理した教育プログラムおよび活動計画 - カリキュラム案・教材案	- 市内学校における導入・活用実績 - 教員・ALT向け指導マニュアルおよび運用資料

グローバル人材には、4 技能 5 領域の素養以外にも、異文化理解力や主体性が求められます

グローバル人材に必要な素養



- **主体性：**
自分で能力を上げようと試みる気持ち
- **聞く力：**
相手が話す内容、意図を理解できる力
- **読む力：**
社会的な話題や時事について、概要を捉えられる力
- **話す力：**
自身の経験に基づき、情報や考えを発表／意見交換できる力
- **書く力：**
正しい文法や表現で文章を作成できる力
- **異文化理解 (Cultural Intelligence)：**
文化的背景の異なる人々を理解し、適応できる力

小中学校の外国語（英語）授業においては主に
読む／書く能力や聞く／話す能力の土台となる知識を習得可能

より高度なグローバル人材の育成に向けては
「聞く／話す力」・「主体性」・「異文化理解」を伸ばす必要がある

R8年度においては、学校側の導入ハードルが低い時間にて、外国語／異文化に触れるプログラムを導入する方針で、市内のモデル小学校と連携していきます

公教育への落とし込み方と今後の進め方

実施概要	パターン① 単日の数コマ 単発の 学習プログラム実施	パターン② 学校内での隙間時間 隙間時間中のトークテーマや 課題を設定し、対話を促進	...
	• 普段の授業とは違う環境で、対話機会を増やす等、普段の授業とは違うプログラムを実施 • ALTを複数人配員することで、効果性向上	• 給食や掃除中、朝の学活の時間にて、より対話力が身に付いたり、外国語学習に対して興味が湧く学習を設計	
獲得を目指す素養	B：学び続ける主体性	A：コミュニケーション能力 (聞く／話す)	
	C：異文化理解	C：異文化理解	

プログラム内容の具体化は、学校英語教員やALTなどとディスカッションを実施

R8年度では、

- ✓ 本プログラムに対する関心の高さを鑑みてモデル小学校を選定
- ✓ モデル小学校の英語教員やALTと討議を重ね、内容を具体化

まず学校側に導入を目指すパターン（②により注力）

プログラム内容は、グローバル人材の育成に資する観点を考慮しつつ、 学校への導入ハードルを踏まえて、授業やCAN-DOリストとの連動性を高めた設計とします

プログラムの実施方針案

観点	A：コミュニケーション能力 (聞く／話す)	B：学び続ける主体性	C：異文化理解
成功の ポイント	■ 実践的な英語に触れる（耳を慣らす）機会を確保する ■ レベルを問わず、参加学生に「伝わった！」という成功体験を得てもらう	■ 外国語や異文化を学ぶ楽しさや魅力を各々で見つけてもらう ■ （上記の楽しさや魅力と、自分のキャリアや学習方針を結びつけてもらう）	■ 自分が興味を持てる国、民族、国家文化などを見つけてもらう ■ 偏った思い込みを持たないように多様な観点で情報を提供し、特定の正解を作らない （NG：ステレオタイプの形成に繋がるような内容。西洋文化に偏った学び等）
実施 方針案	■ 歌や映画等の楽しめるコンテンツを用いて英語を聞く機会の拡充 ■ 自主的／ペアでの発話学習を繰り返しながら、定期的にALTと会話し、レビューを貰えるサイクルの運用	■ 現在、指導室が企画して実施中のコミュニケーションプログラムを基にした、より実践的な環境で外国語を使う体験の設計	■ 遊びや授業での取り扱いテーマを入り口にしつつ、多様な文化／切り口で学びを深めることができる設計 ■ 各学生がそれぞれ、興味を持った文化の理解を深めることができる設計 ■ ALTが自らの文化や考え方が共有できる機会の設計
+			
実施 方針案	■ 英語授業の各単元で扱う言語活動を用いて、CAN-DOリストの学習到達目標に至るレベルのことが学べる設計を採る → 学校側として、「普段の学習の振り返り」という位置づけを取れることで、モデル校での導入や市内学校への横展開のハードルを下げる		

交通施策

本年度は東西基幹および勇払地域において2つの実証を行い、移動の利便性向上とサービスの持続可能性の改善の両立を推進する

R8年度 実施内容要旨

新たな基幹交通サービス（急行バス）の設計・実証

検討内容（現時点）

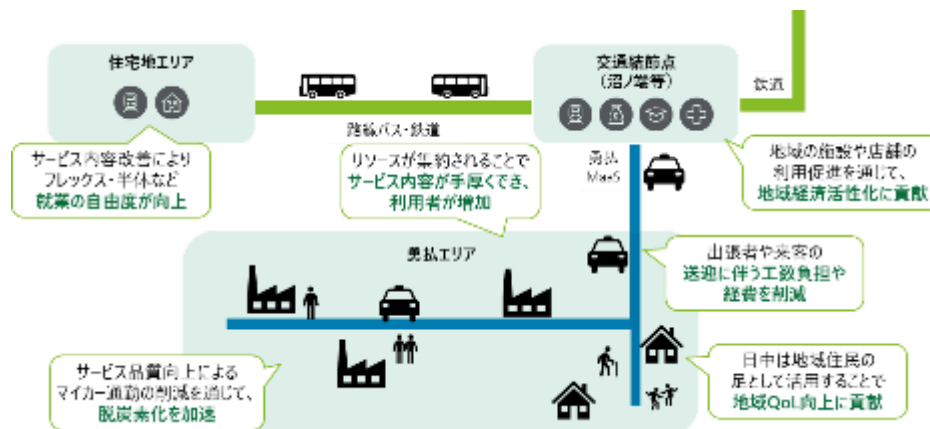
- 市中心部⇔空港を結ぶ急行バスの設計
- 2週間程度の実証運行による利用ニーズ・事業性検証

取組意義

- 昨年度のデジタル実証で有効性が認められた定時性・速達性の確保を実際のサービスにおいて実現し、マイカーからの移行による脱炭素社会の実現と高齢者の免許返納を促進
- 空港への移動に加え、ラピダス等による千歳方面への通勤需要に対応できる新たなサービスとして、近隣市町を含む広域を活性化

社会実装に向けた展望

- 今年度の実証結果を踏まえ、次年度に本格運行に向けた体制整備を実施予定



生活の足×通勤移動を支える勇払MaaS実装

検討内容

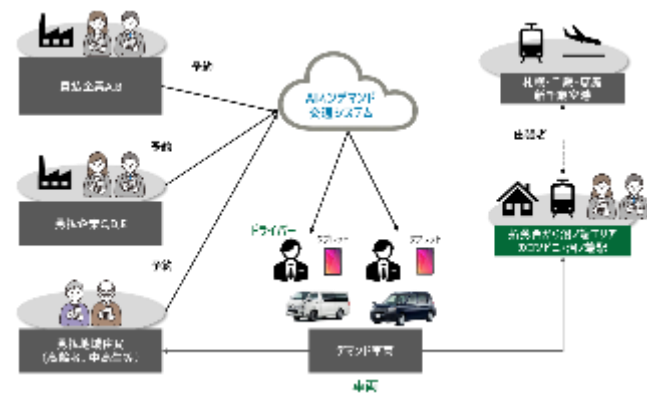
- ・ 昨年度、個別に実証を行った住民向け「あいとまタクシー」と企業共同運行の「とまコネクト」のサービス連携・統合に向けた実証
- ・ R9年度の社会実装を目指し、運行主体、収益性等を具体化

取組意義

- 運賃のみで維持が困難な地域住民の生活の足を、企業からの協賛を得ることで支える全国的にも画期的なモデル
- マイカー離れが進む若者にも働きやすい環境を整備することで“選ばれる街”の一助となることに加え、企業の働き手不足解消にも貢献

社会実装に向けた展望

- ・ 各企業と連携した事業スキームについて合意形成を図り、R9年度の実装を目指す
- ・ 苦東・他地域への横展開も視野に入れた検討を行う



事業状況サマリ

施策名：東西基幹交通

本施策の目的	市の東西を結ぶ基幹軸において、公共交通の輸送力と定時性・速達性を確保し移動利便性を大きく向上させることで、マイカーからの移行による脱炭素社会の実現と高齢者の免許返納を促進する
3か年でのゴール	東西基幹交通における輸送力強化、定時性・速達性の向上による、マイカーからの転換によるGX先進都市への貢献、および地域住民の生活サービスへのアクセス性改善による住民満足度向上
R7年度の実績	- インフラ整備・サービス設計の二面から、輸送力強化、定時性・速達性および乗車体験の向上に資する施策案を整理 - 最先端シミュレーション技術を活用し、①支線路線のデマンド交通への置換、②通勤MaaS導入効果、③幹線路線の輸送力強化、速達化による効果および施策の有効性を導入前に定量的に検証

事業状況

サマリ	昨年度は先端デジタル実証にて、東西基幹交通での速達性向上がマイカーからの転換に有効であることを明確化。 今年度は、新たな基幹交通サービスの設計及び実証運行を予定
-----	---

	R7年度	R8年度	3か年
取組・成果	- 交通事業者との協議を通じて、交通施策案を整理 - デジタルツインを用いたシミュレーションの実施 - シミュレーション結果を踏まえた施策案の評価と優先順位整理 - 次年度の取組内容の整理（実証計画等）	- R7シミュレーション結果を踏まえた新たな基幹交通サービスの設計 - 市中心部から空港等への急行バスサービス - 東西基幹交通における実証運行 - 新サービスの事業性検証	- R7、R8成果を踏まえた交通施策の導入試行 （例）ICカード導入、バス優先レーン、交通結節拠点の整備、等 - 新サービスの運行体制の整備
成果物	- 交通施策案の評価結果 - R7年度の実証計画	- 新たな基幹交通サービス案 - 実証運行結果 - 事業性検証結果	新たな基幹交通サービスの実装

市内交通網のリデザインを通じて、マイカーからの転換によるGX先進都市への貢献、および地域住民の生活サービスへのアクセス性向上による住民満足度の向上を目指す

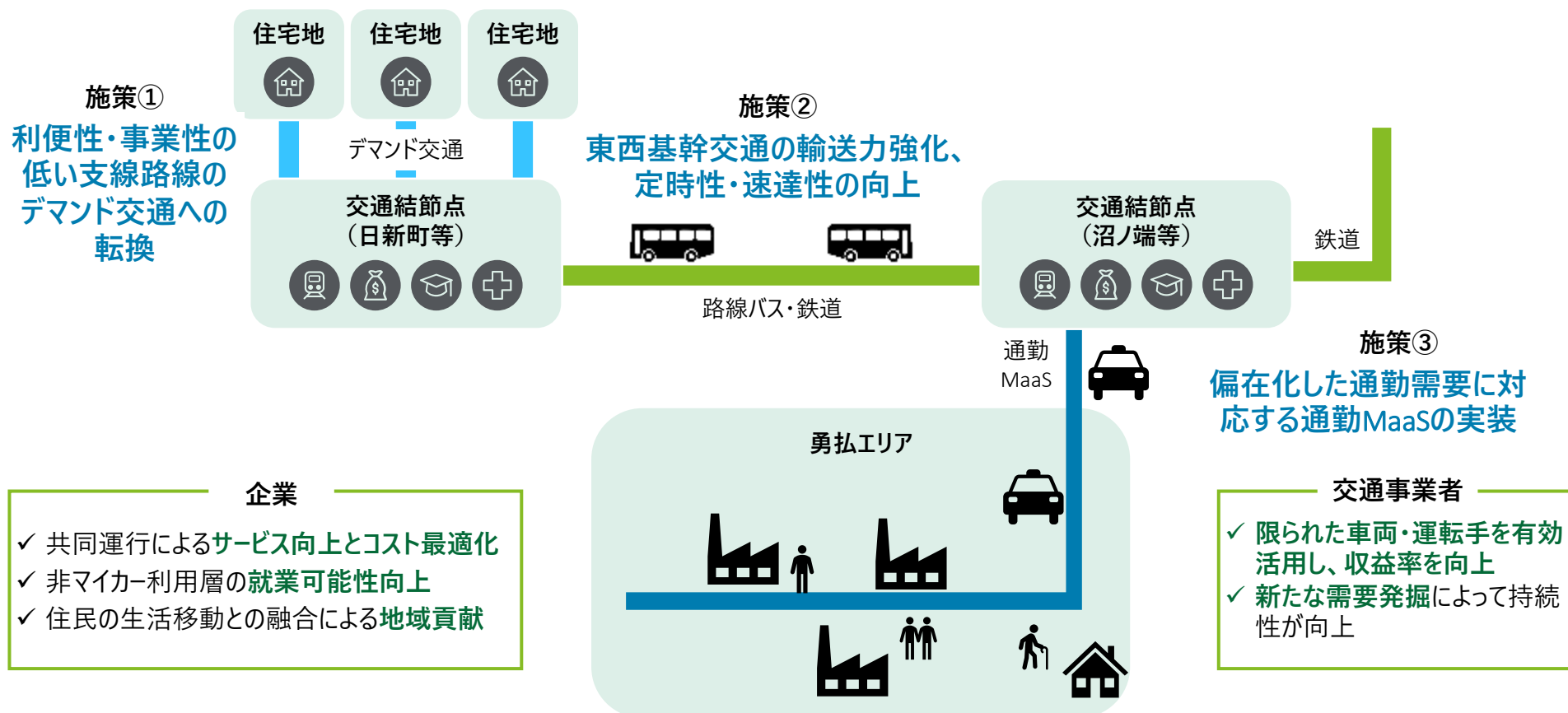
苫小牧市の目指す公共交通の姿

地域住民

- ✓ 教育・医療・買物等、生活サービスへのアクセス性の向上
- ✓ 外出機会、コミュニティ交流の増加による経済活動の活性化
- ✓ 生活の質の向上による居住価値、住民満足度の向上

苫小牧市

- ✓ 持続可能な公共交通の実現
- ✓ CO2排出量の削減および交通渋滞の軽減
- ✓ 人流創出による交通結節点での新たなにぎわい創出



3カ年で実証を通じた社会実装・サービス拡大を達成するべく、段階的に取組を深化させる

3カ年ロードマップ



ソーシャルデジタルツインの技術を活用し、基幹交通システムに向けた施策の「確からしさ」をデジタル空間上のシミュレーションで確認し、関係者との合意形成を加速させます

ソーシャルデジタルツインのご紹介



検証内容	① 市西部エリア 支線路線のデマンド置換効果	② 市東部における 通勤MaaSを想定した デマンド導入効果	③ 東西を貫く幹線路線の輸送力強化・速達化による効果	①～③の 同時実施による 効果
シナリオを実現するための施策（例）	市西側住宅地周辺エリアでのデマンド交通への置換	通勤MaaSにおける企業乗合によるサービス水準の向上 企業需要 + 勇払地域住民のサービス一体化	A. 急行バス B. 幹線道路へのバス優先/専用レーン設置 C. 信号現示調整 ※ 接続バスは特定便への利用者集中が見られた場合に検討	

苫小牧未来まちづくり戦略に沿った交通施策の有効性シミュレーションにより、東西基幹軸における速達性向上がマイカーから公共交通への転換促進に有効であることが実証された

【R7成果】シミュレーション結果総括

シナリオ	公共交通利用者数の増加効果	二酸化炭素排出量削減効果	サービスの収益性向上効果
① 東西速達化	✓ 自家用車利用者が減少し、鉄道・バス利用者合計が増加した	✓ 速達化秒数によらず、自家用車の利用者減少に伴い、二酸化炭素排出量も削減された	速達化秒数によらず、同じ運行コストに対して運賃収入が伸びており、収益性向上がみられた
② 市西部バス路線のデマンド転換	✓ デマンド利用者の定員上限に迫る利用者数が確認できた ✓ 一方で、デマンド車両台数に関わらず、マイカーからの利用数に変化はみられなかった	✓ 自家用車利用者数にほとんど変化がみられず、二酸化炭素排出量についても削減効果はみられなかった	✓ バスおよびデマンドの合計収支がいずれのシナリオでも悪化した ✓ デマンドの台数が増えると、運行コスト増加によってさらに収支が悪化した ※シナリオ上バス路線を廃止していないことに留意
③ 通勤MaaS・あいとまタクシー導入	デマンドが接続する、鉄北北口線、千歳空港線といったバス路線の利用者の増加が見られた	自家用車利用の減少はみられたものの、トータルでの二酸化炭素排出量は横ばいであった	✓ バス運賃の収入が増加している一方で、デマンド交通側での赤字が影響し収支は悪化している ※シナリオ上バス路線を廃止していないことに留意
④ 同時実施	✓ 施策の同時実施によって、鉄道・バス・デマンド利用者数合計の増加がみられた	✓ 自家用車利用が減少、二酸化炭素排出量についても削減効果がみられた	✓ バス・デマンド交通の運賃収入が運行コスト増加分を上回っており、公共交通全体での赤字額が縮小された

シミュレーション結果を踏まえ、東西基幹軸におけるバス輸送の速達性向上、輸送力強化に資する新たなサービスの設計を行い、実証運行によってニーズ及び施策効果を検証する

【R8計画】東西基幹交通における新サービスの実証

推進上のポイント

- R7年度は先端デジタル実証にて、東西基幹交通での速達性向上がマイカーからの転換に有効であることを明確化
- R8年度は、新たな基幹交通サービスの設計及び実証運行を予定



新たな基幹交通サービスの設計 (4-7月)

- **新サービス案の構想**
 - ・ 市中心部から空港等への急行バスサービスを候補として、サービス案を設計
 - ・ ルート、停車場所、料金、予約要否等
- **ソーシャルデジタルツインでのシミュレーション**
 - ・ ルートや停車場所、料金等で複数パターンのシナリオを作成し需要検証を行う
- **速達性向上施策の具体化**
 - ・ 速達性、定時性向上のための施策を具体化（有効性、実現性、コスト等）
- **路線バスへのICカード導入**
 - ・ 導入に向けた調査（コスト、方法等）
 - ・ 道南バスとの協議

東西基幹交通における実証運行 (8月～12月)

- **実証運行準備**
 - ・ 車両・ドライバーの確保等を交通事業者と調整
 - ・ 運輸支局や警察等から必要な許諾を取得
 - ・ 利用者の確保に向けた周知を実施
- **実証運行**
 - ・ 市中心部～新千歳空港までの急行バスを実証運行
 - ・ 2週間程度を想定、有償運行も検討
- **ナイトマバスの運行見直し**
 - ・ 予約や運金収受等のオペレーション効率化方法を検討
 - ・ ICカードと合わせて、システム導入の可能性について調査

新サービスの事業性検証 (翌1-3月)

- **事業性、運行スキーム検討**
 - ・ 収益性
 - ・ 運行主体
- **接続バス・FCVバス等の導入可能性調査**
 - ・ 導入に向けた初期調査（コスト、課題、導入する場合の進め方、等）
 - ・ 道南バス、バス製造事業者との協議

事業状況サマリ

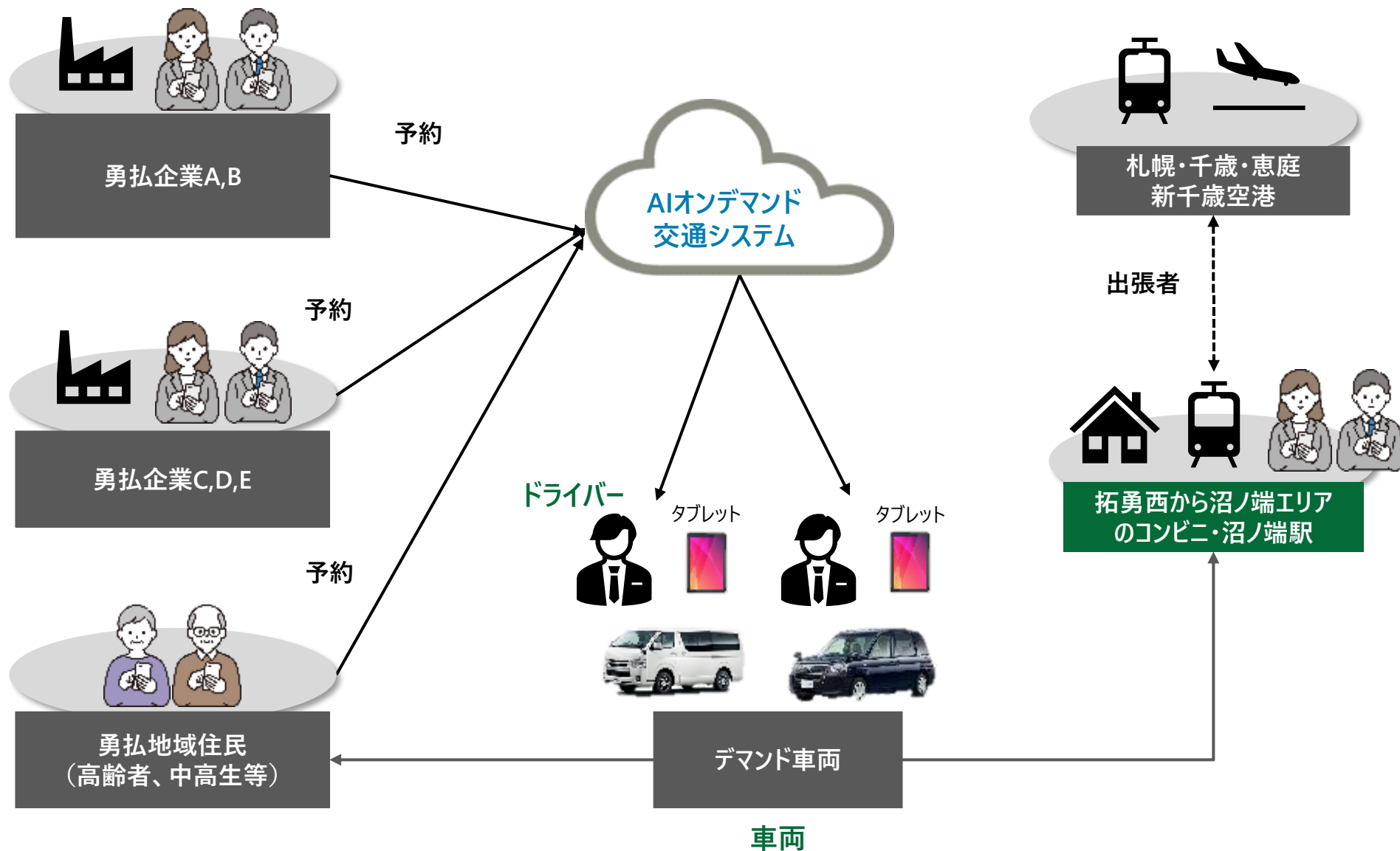
施策名：通勤MaaS

本施策の目的	地域内の複数企業の従業員が乗り合うことで、マイカーからの乗換による脱炭素効果および渋滞の緩和、移動弱者の就業促進による働き手不足の解消を目指す
3か年でのゴール	■ 勇払地区において、通勤・生活双方の需要に対応可能な移動サービスを実装するとともに、持続可能な事業モデルを確立する ■ 勇払で構築したサービス・事業モデルの市内他地域への横展開を推進する
R7年度の実績	■ 勇払地区の複数企業、交通事業者と協議のうえで、通勤MaaSのサービス内容を設計し、実証運行を実施 ■ 実証結果を元にサービス需要と必要なサービスレベルの検証、収益性、運行形態の検討、企業との連携体制案を整理

事業状況

サマリ	R7年度は勇払地区の複数企業による乗合での実証運行を実施し、需要や事業性を検証した。 R8年度は地域住民向け「あいとまタクシー」との統合実証を行い、実装に向けた運行主体、収益性等の確立を図る		
	R7年度	R8年度	3か年
取組・成果	・ 通勤MaaSの各社共同運行実証に勇払の企業5社が参画 ・ 1月中旬から約2カ月間の実証運行を実施し、延べ335件利用 ・ 実証結果を元にサービス需要の検証、運行上の課題等を整理	・ 生活の足を担う「あいとまタクシー」とのサービス連携検討 ・ 各企業と連携した運行体制・事業スキームの構築 ・ 苫東等、市内他地域への横展開の準備	・ 勇払地区での実装 ・ 苫東等、他地域への横展開
成果物	・ 勇払地区における需要調査結果 ・ 実証運行結果 ・ 事業性試算/スキーム案	・ 通勤・生活統合での実証運行結果 ・ 実装に向けた持続的な事業モデル（運行体制、収益性等）	・ 勇払エリアにおいて、利便性・持続性のある移動サービスの実装

各社共同運行の実現により、企業側での通勤サービス向上とコスト最適化、非マイカー利用層の就業可能性向上と、まちづくり側でのCO2排出量の削減および交通渋滞の軽減を図る



R7年度は勇払地区の複数企業による乗合で約2か月間の実証運行を実施し、需要や事業性を検証、実装に向けた課題の整理等を行った

【R7成果】勇払での通勤MaaS実証運行結果

実証運行結果

■ 利用実績

各企業様より**モニター20名**を抽出、**約1.5カ月**で計**335件**の乗車がみられた

■ モニターへのアンケート・ヒアリング

利用シーンについての発言例

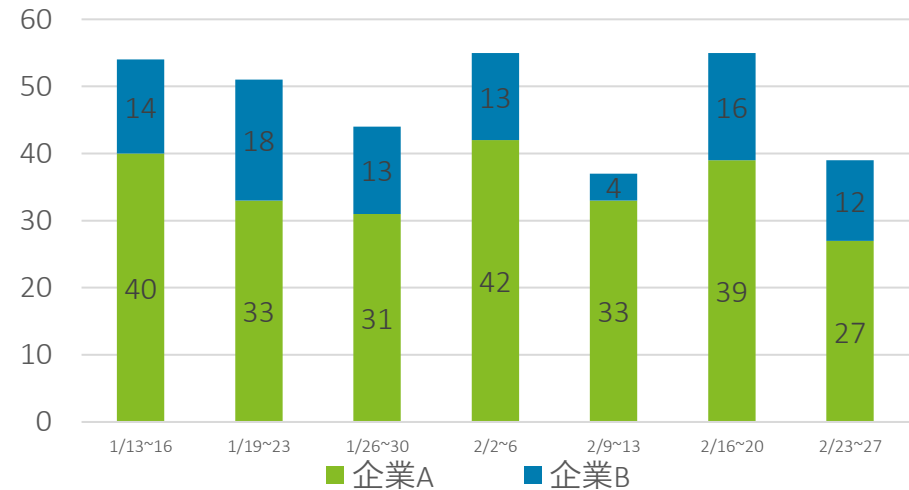
- ✓ 雪道の運転に自信がなく、冬季期間中に利用でき助かった（20代、60代女性ほか）

乗車場所についての発言例

- ✓ 冬の時期であれば自宅⇄停留所が10分圏内でも運転を回避したい。夏場であれば5分圏内であれば利用する（60代女性）

所要時間についての発言例

- ✓ 朝便のダイヤだと普段より少し早く到着してしまうため少々抵抗があったが、乗り続けているうちに習慣化した（20代女性）
- ✓ 早退等でもマイカーを利用せずに済み、柔軟な働き方ができるようになった（30代男性）



（図）週別利用者数の推移

次年度には地域住民向け「あいとまタクシー」との統合実証を行い、社会実装に向けて運行主体、収益性、運行システムの確立を図る

【R8計画】「あいとまタクシー」とのサービス連携検討

推進上のポイント

- R7年度は勇払地区の複数企業による乗合での実証運行を実施し、需要や事業性を検証した
- R8年度は地域住民向け「あいとまタクシー」との統合実証を行い、実装に向けた運行主体、収益性等の確立を図る



「あいとまタクシー」と連携検討 (4-6月)

実証運行 (TBD)

運行体制・事業スキームの構築 (翌1-3月)

あいとまタクシーとの統合

- サービスデザイン
 - あいとまタクシーとのサービス統合に向けた運行案の設計
- 事業モデルの検討
 - 実装に向けた運行主体、スキーム等を設計
 - 実証における検証内容を整理

- 実証運行準備
 - 車両・ドライバーの確保など、実証に向けた体制を整える
 - 実証運行にあたり運輸支局や警察等から必要な許諾を取得
 - 利用者の確保に向け周知を実施
- 勇払MaaS実証運行
 - 勇払エリアで3カ月程度の実証運行を想定

- 事業モデルの構築
 - 実証結果を踏まえ、実装時のサービス内容、運行主体、スキーム等を精緻化

横展開

- 苫東等、市内他地域への横展開の検討
 - 苫東への展開に向けた機運醸成、サービス設計、関係者との協議
 - 西地区の支線デマンド化に向けた協議

市内企業向けGX推進

事業状況サマリ

施策名：市内企業向けGX推進

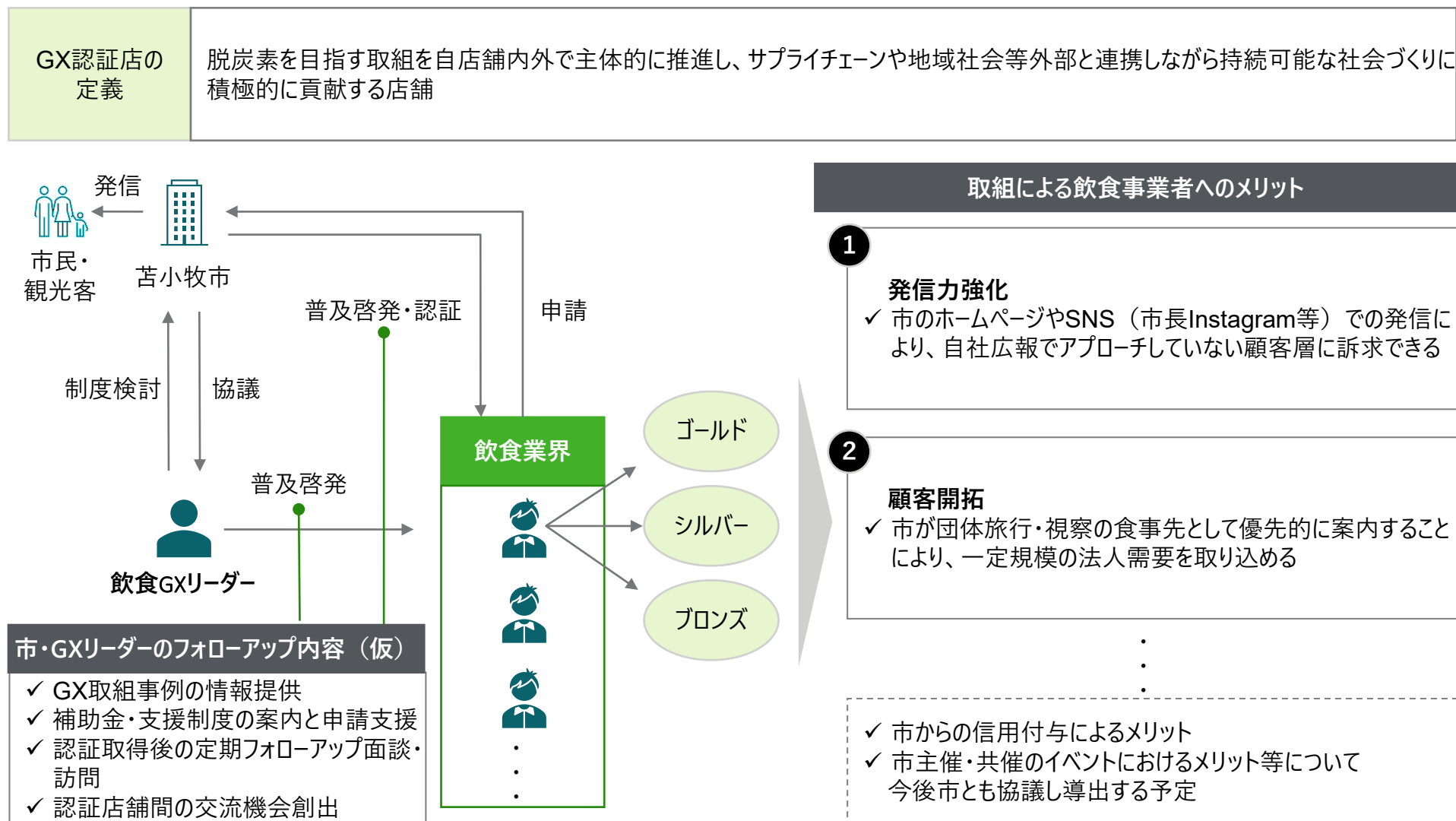
本施策の目的	GX産業によるビジネスチャンスを活かして、市内の地元事業者には裨益をもたらす取組を業界別に展開・フォローアップを行い、地元事業者におけるGX人材を育成する
3か年	市内業界別のGX推進にかかる取組の複数展開と行政フォローアップの体制づくりによる、地域で事業者自身がGXの取組を市内で自走する仕組みづくりの構築
R7年度の実績	- あるべき姿に基づき、業界別の取組案を企画、次年度に実施するGX人材の掘り起こしを実施 - GXへの理解促進を目指す人材育成マニュアルを作成

事業状況

サマリ	今年度 市内の飲食・建設分野でGX推進の核となる人材を掘り起こし、来年度に向けた制度・場づくりの内容について決定・4月以降で取組を実施中		
	R7年度	R8年度	3か年
取組・成果	- 飲食：7～8社とGX取組店舗の認証制度導入について協議し、R8年度後半の制度運用に向けて合意 - 建設：5社と補助金活用を核とした取組を協議し、建設GXコミュニティの概要を設計 - GX人材育成マニュアル基礎編作成	- 飲食GX認証制度の実施に向けた詳細設計・プレ実証の運用における課題抽出・改善 - 建設GXコミュニティにおけるGX関連支援制度の理解・活用促進 - 市内他業界での取組可能性検討、業界内のプレーヤー掘り起こし	- 飲食・建設業界における各取組の実施課題を踏まえた、定着・自走化に向けた支援・フォローアップ体制の改善検討 - GX推進にかかる他業界での取組展開
成果物	- 飲食・建設業界におけるGX推進に向けた取組内容 - 人材育成マニュアル基礎編	- 飲食・建設業界における取組展開 - 市内他業界への展開可能性・関係者協議を踏まえた取組の導出	- 飲食・建設業界におけるGX推進に係る取組の定着 - 他業界への取組展開

苫小牧市公式のGX認証制度を段階別に設けたうえで、来街者へ優先的に案内することによる顧客開拓のメリット等を想定しています

飲食サービス業界における施策案のモデル図



GX推進と地域への裨益・波及のアクションを兼ね備えた企業を、取組レベルごとに3つのランクで評価することを想定しています

GX認証店の定義

GX認証店の定義	脱炭素化をはじめとしたGX推進に係る取組を自店舗内外で主体的に推進し、サプライチェーンや地域社会等ステークホルダーと連携しながら持続可能な社会づくりに積極的に貢献する店舗
----------	---

GX認証店の要素	■ 自店舗において、脱炭素につながる取組を実施している ■ 自店舗内のみならず、ビジネスに関わるサプライチェーンも含めてGXの取組を波及するよう試みている ■ 経営層だけでなく、店舗従業員が一体となって取り組んでいる ■ 地域社会への貢献意欲があり、貢献意欲があり、積極的にまちづくりの取組等にも参画している
----------	--

各ランクにおける店舗像	
ランク	店舗像
ブロンズ ★☆☆	GXの基本的な考え方を理解し、日常オペレーションの改善等による省エネ・資源削減に着手している
シルバー ★★☆	自店舗でのGX活動の定量的推進に加え、サプライチェーンや地域社会に取組を広げ、従業員も一体となって持続可能な社会づくりに協力する
ゴールド ★★★	店舗・サプライチェーン・地域社会を横断した先進的なGX活動を牽引し、全体の脱炭素化と社会的インパクト創出を担うリーダー店舗



評価基準イメージ

ゴミ分別やLED照明への切替といった基礎的な取組から、再エネ利用の取組までをランクごとに設定します

認証基準：GXにかかる取組一覧（仮案）

取組リソース（ヒト、モノ、カネ）の量	取組内容	成果指標	ランクごとに求められる行動範囲		
	分別・リサイクル推進	分別量	ブロンズ ★☆☆	シルバー ★★★☆☆	ゴールド ★★★★
	LED照明・高効率設備への更新	消費電力削減率			
	電力・ガス等の使用量計測	電力・ガス使用量			
	⋮	⋮			
	地産地消食材の使用	食材の移動距離（フードマイル）			
	フードロス対策	フードロス削減率			
	従業員への研修	脱炭素への取組に対する理解度			
	⋮	⋮			
	再生可能エネルギー電力の導入	再エネ比率			
	食品廃棄物の資源循環（堆肥化・飼料化等）への参加	廃棄物の提供量			
	サプライチェーンにおける脱炭素化	カーボンフットプリント削減量			
	⋮	⋮			

店舗周辺にかかる地域活動を基本としつつ、地域活性・まちづくりに資する取組についてもランクごとに設定します

認証基準：地域貢献にかかる取組一覧（仮案）

	取組内容	成果指標	ランクごとに求められる行動範囲		
			ブロンズ ★☆☆	シルバー ★★★	ゴールド ★★★★
取組リソース（ヒト、モノ、カネ）の量	店舗周辺の清掃や交通安全運動等への参加	清掃回数・地域活動の参加数	ブロンズ ★☆☆	シルバー ★★★	ゴールド ★★★★
	市内イベント／祭りへの協賛PR協力等	ポスター掲示等協力回数			
	地元産品の利用	地元産品利用回数			
	⋮	⋮			
	市広報等への掲載協力	市広報等への掲載協力回数			
	市内イベント・祭りへの参加	市内イベント等の参加・出店回数			
	市民団体・学校と連携した食育や環境教育	類似イベント実施回数			
	⋮	⋮			
	地域雇用の創出や多様な人材の活用	地元雇用者数、女性・高齢者・外国人等の雇用比率、雇用継続率			
	地域防災拠点や避難所協力	防災訓練参加回数、災害時の支援提供実績			
	自社主催・共催による地域活性化イベント開催	イベント開催数			
	⋮	⋮			

PR・集客機会の創出をテーマに情報発信と権利付与をGX認証店のインセンティブとし、市の既存事業とも連動しながら各事業者のGXにかかる取組を誘引します

GX認証制度の取組インセンティブ（仮案）

インセンティブ の観点

✓ GX認証店が「実利的なメリット（集客機会創出）」と「社会的評価（企業価値向上）」の両方を得られる仕組みを提供すること

項目

インセンティブ内容（仮案） ※市と今後協議予定

情報 発信

- 市長SNSにて認証店紹介（市長のランチ）
- 道内インフルエンサーによる苫小牧市GXの取組紹介（その中でGX認証店の取組も紹介）
- 市公式ホームページ・広報誌・観光パンフレットに認証店を特集掲載し、観光客・市民向けに広くPR
- 観光大使による発信（仕様書に認証店紹介を要件として盛り込む）
- 市公式YouTubeで「GX認証店特集」動画を制作・配信



権利 付与

- 市主催のイベント（みなと祭り等）でGX認証店エリアを設け、当該エリアへの優先参加権を付与
- 市主催のイベント・ツアー（企業誘致・MICE等）にGX認証店を優先案内
- 市主催の環境・観光プロモーション動画や冊子に認証店を優先的に掲載する権利を付与
- 認証店限定のデジタルスタンプラリーやクーポンキャンペーンへの参加権を付与
- 市独自のエコポイント・商品券・キャッシュレス還元制度への参加権を認証店に付与



市民へのGX意識普及・啓発

事業状況サマリ

施策名：市民へのGX意識普及・啓発

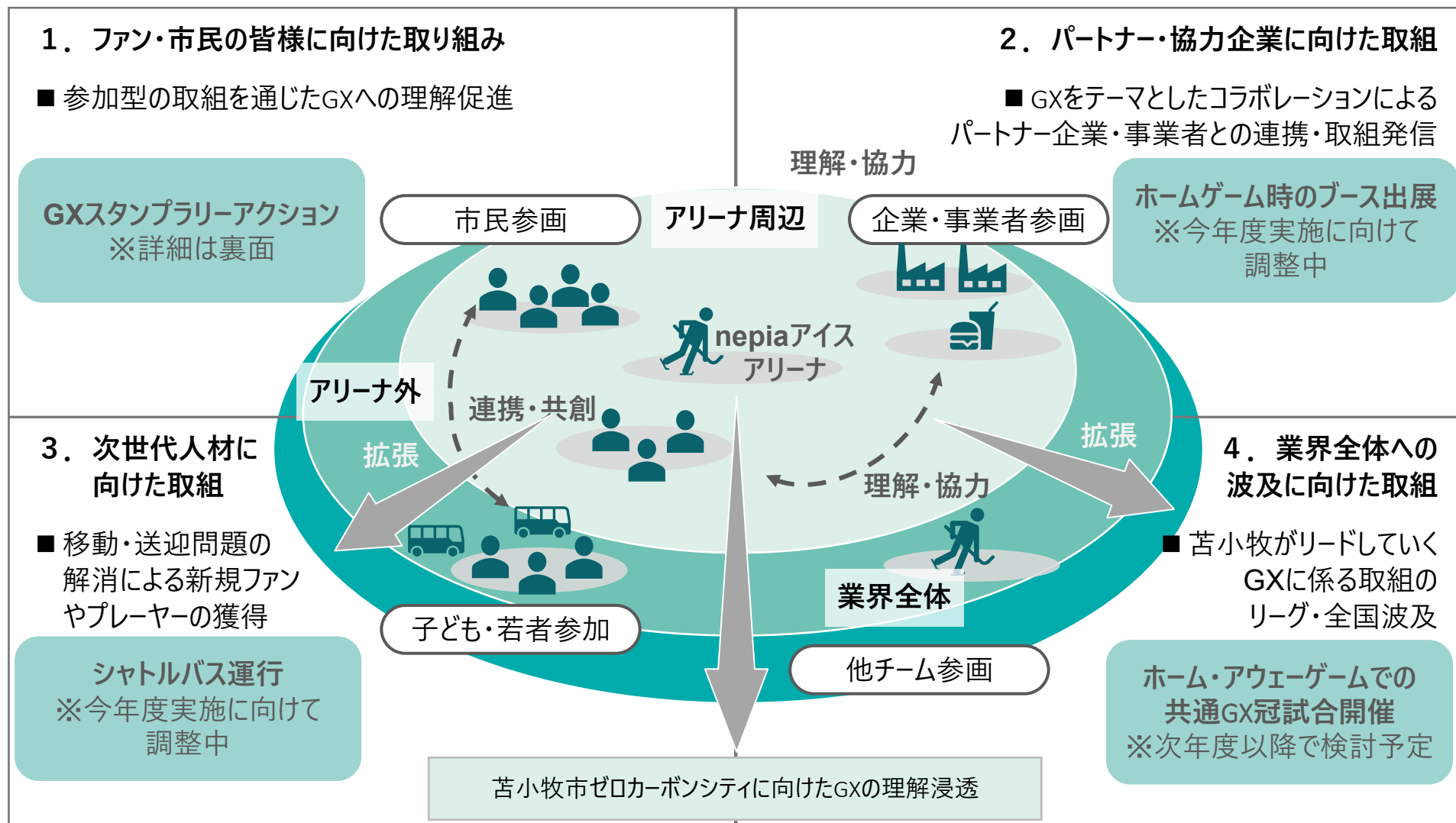
本施策の目的	各政策分野の課題解決やメリットを導出しつつ、GX産業の更なる集積や市民等のGX意識向上に資するGXフィールドを展開・形成する
3か年のゴール	政策3分野の課題解決と政策に関係する市民・事業者・行政それぞれのGX意識向上を促進し、 <u>各主体におけるGXに関連する具体的アクションを自走化</u> させる
R7年度の実績	- GXフィールドの方向性・意義を策定し、対象<u>政策分野の取組メリットを導出</u>した - 各分野において実施主体となる関係者（スポーツ・観光）との次年度の<u>実証内容案・実施スケジュールを策定</u>した

事業状況

サマリ	スポーツ分野におけるレッドイーグルス北海道とのGX意識醸成に向けた実証策定、 観光分野におけるGXツアープラン案の策定		
	R7年度	R8年度	3か年
取組・成果	- スポーツ：<u>ファン向けGXスタンラリー、パートナー企業向けGX協賛プラン案策定</u> - 観光：GX関連のPJをコンテンツとした<u>企業・学校向けの観光プラン策定</u>	- レッドイーグルス北海道の<u>新規のファン層・パートナー企業獲得</u>とGX意識の醸成 - 他スポーツでの展開可能性・取組内容検討 <u>他政策分野におけるGX推進に向けた実施内容検討</u>	- レッドイーグルス北海道におけるGX推進の<u>自走化に向けた伴走支援</u> - 他スポーツ業界における取組の展開・他政策分野におけるGXフィールドの展開
成果物	- スポーツ（レッドイーグルス北海道）×GXにおける次年度実証計画 - ターゲット別観光GXツアープラン案	- レッドイーグルス北海道における実証成果・課題の導出 - 他政策分野における実証計画	- 他スポーツ業界における取組内容の展開 - 他政策分野における実証成果導出

レッドイーグルス北海道と苫小牧市が連携して取り組む、地域共創型のGXプロジェクトです。 ファンが選手やチームに向ける応援の力を、環境や地域社会の未来をより良くする行動へと 広げていくことを目指しています

「レッドイーグルス北海道×GXプロジェクト～応援が、未来のちからになる～」のイメージ



難しい知識がなくても参加でき、楽しみながらGXに触れる・学べる、さまざまな参加型アクションを展開します

GXアクションスタンプラリーの各開催概要

アクション	おうちdeGX アクション	驚グッズ-1× GXグランプリ	クリーンアップ 作戦 @トマペ イウォーター フロント	WASHトーク ×GX	エコ来場 @氷夏フェス
実施 日程	6月20日～ 8月22日	6月28日（日）	7月4日（土）	8月7日（金）	8月22日（土）
時間	-	10:00～11:30	13:00～14:30	調整中 （夕方開催）	調整中 （試合時間内）
アクション 内容	指定ハッシュタグ 「#REHGX」を付 けて、GXに繋がる アクションをSNSに 投稿	「REH×GX」を テーマにワーク ショップを行い、 グッズ案を募集	場内でのゴミ回収 に参加し、複数 チーム対抗で回収 したゴミの量を競う	「アイスホッケー ×GX」をテーマにし たパネルトークで GXの重要性を 発信	公共交通機関 ・徒歩・自転車 でプレシーズンマッチ に来場
開催 場所	SNS （Instagram,X等）	苫小牧市民 文化ホール ルーム1	キラキラ公園	nepia アイスアリーナ	nepia アイスアリーナ
イメージ					

スタンプラリー
達成者
限定特典
の提供

スタンプラリー達成者特典は2段階を想定しています

特典内容イメージ（仮案）

特典内容（3個以上達成者）

オリジナルデザインのスマホ壁紙



選手からのサンクスメッセージ（動画もしくはカード）



特典内容（5個以上達成者）

GX驚グッズの命名権



GXコラボ仕様の限定グッズ



特典内容は仮案であり、変更となる場合があります

パートナー企業向けには、次世代との接点づくりや地域住民への事業理解促進につながる協賛プランを検討します

パートナー企業向け協賛プランの方向性

想定ターゲット	新規アプローチ（GXプロジェクトを保有する企業等）	既存アプローチ（市内企業等）
企業ニーズと課題	地元根付いた企業として、地域住民への事業理解を促進したい 企業が地域に飛び出し、事業に対して身近に触れる機会づくりが必要	若手の人材採用に苦戦している子どもたちとつながる機会が少ない 会社名としての接点だけではなく、仕事内容も知ってもらう機会づくりが必要
提供価値	地域住民と触れ合いながら、GX関連プロジェクトを紹介・体験を発信する場・機会の提供	子どもたち（小学校～高校生）に向けて仕事内容を紹介・発信する場・機会の提供
プランの方向性	ホームゲームや公式SNSにおいて、GX協賛プラン参画企業の事業を紹介し、選手を活用しながらファンの目に触れさせるプラン内容	子どもに関わる機会（親子連れ無料招待、ジュニアチーム練習等、ホームゲーム）とコラボレーションするプラン内容

ファン向け・パートナー企業向け・次世代人材向けに各施策を展開し、当日の会場の更なる盛り上がりにも寄与する想定です

GX DAY当日の内容

対象	ファン	パートナー企業	次世代人材（小～高専生）
目的	これまでのファン参加型施策の成果 見える形で発表する	GXや環境関連の試合会場で発信し ファン・市民との接点づくりに価値を 感じてもらう	子どもやファミリー層の来場ハードルを 下げ、新規ファン層としてアプローチす る
実施概要	- 特設ブースで新グッズの展示 - ワークショップから生まれたアイデ アやコンセプトも併せて紹介 - 開発ストーリーの可視化	2～3企業によるGX・環境配慮 に関する取組の展示を実施	試合当日に、特定エリア（苫小 牧高専or児童館）発着の子ど も向けシャトルバスを運行する
実施 イメージ			